# D.H.ロレンスの『馬で去った女』

## ――異教の神を追って――

市川　　仁

# I

人は何かの風にさそわれて，ふと旅に出てしまいたくなるものらしい．主人公の女性は結婚して13年，男の子と女の子の２人の子どもがあり，夫は20歳年上．銀鉱山を経営していたが，戦争で銀も商売にならなくなり，今では養豚に転じていた．彼女は33歳．ある日，夫と子ども，そしてそれまでの生活すべてを棄てて，馬に乗って家出をしてしまう．行き先ははるか山の向こうのインディアンの住む村．きっかけは，夫の客で鉱山技師の若い男性がなにげなく口にした

> “I wonder . . . what there is behind those great blank hills. . . .”
> “But surely they have old, old religions and mysteries — it *must* be wonderful, surely it must.” (41-2)

という一言であった．彼女はその後，夫からも，（白人から見れば）野蛮な宗教や習慣を持つインディアンが住んでいるという話を聞き出した[(1)]．コルテスに滅ぼされたアステカ帝国最後の皇帝モンテスマの子孫やアステカの王の子孫が今でも住んでいて，年老いた司祭たちが古代宗教を維持し，人間の生贄を捧げているという話であった[(2)]．この言葉が彼女の中に眠っていた何かを目覚めさせ，山の向こうに行くことが彼女の「運命」（“destiny”）だと感じるようになる．

ここから，白人女性の（われわれの理性で考えれば）血迷った行動が物語に仕立て上げられてゆく．「血迷った」というのは，この女性，無謀にもインディアンの村へと一人で旅立ち，そこに着いてからしばらく養われたあげく，最後には生贄として祭壇に運ばれ，裸にされて，その心臓を太陽に捧げることになるからである[(3)]．物語は彼女の心臓を取り出す場面を描くには至っていない．余韻を残す形で終わっている．

話が話だけに，この短編への評価はさまざまである．たとえばグレアム・ハフは *The Dark Sun* で“perceptibly nearer to a fable than to a realistic novel”（145）だとかこの短編は“his completest artistic achievement”であり“his profoundest comment on the world of his time”（146）と言って，ロレンスが生きた時代に対する深い洞察を芸術的に完璧な形で描き出した寓話であるととらえ，ウェルドン・ソーントンは

> Just as the woman embodies the end of the road of a kind of Western individualism, the Indian tribe embodies a devolution and turning back upon itself of their culture.
> . . . Lawrence thus shows us that a culture as well as an individual can resort to desperate devices and rationalizations during its decline.（*D. H. Lawrence : A Study of Short Fiction* 83-4）

と言って，この短編が西洋的個人主義の終焉とインディアン文化の衰退を描きながら，文化も個人もその衰亡期には何とかして生きのびていこうとしてすてばちの手段に訴えるものだということを描いているとみる．あるいはシーラ・マクラウドのように

> The woman is no less a Christ-figure than the man in ‘The Escaped Cock’. . . and her death is neither more nor less symbolic than his. The question . . . is, why is a female Christ-figure either necessary or desirable?
> To find the answer we have to go back to the religion of Quetzalcoatl. . . . It would seem that only another woman is capable of restoring potency to the women of the dark races and that, further, the restoration of dark male potency is dependent on that of dark female potency.（*Lawrence's Men and Women* 125）

といったとらえ方もある．彼女はロレンスの短編「逃げた雄鶏」の主人公の男と同じように，キリスト的人物であり，彼女の死も人類救済のためである．そしてあえて女性キリストをもちだしたのは，彼女を生贄にすることでインディアンの女性に力を取り戻すことができ，それによって男性の力をも取り戻すことができるからだという．そしてこの短編が“powerful and often beautiful mythic tale”（129）と認めながらも生贄の場面については“I confess I am uneasy about the sacrifice.”（129）といってロレンスの意図にとまどいを感じている．さらにケイト・ミレットはフェミニズムの立場からこの短編が極度の男性優位を描いたものにほかならないと断じ，女性が生贄にされる最後の場面を取り上げて

> . . . they await the moment when the sun, phallic itself, strikes the phallic icicle, and signals the phallic priest to plunge the phallic knife — penetrating the female victim and cutting out her heart — the death fuck.（*Sexual Politics* 292）

と言う．つまり，“sun”，“icicle”，“priest”，“knife”に象徴される男根が彼女を貫くという形で描いたものであり，まぎれもない“the death fuck”だというのである．もちろんこの短編の筋立てからすれば，そこにサディスティックなあるいはマゾヒスティックな色合いがあることは否めないし，ポルノグラフィー的な読みを可能にする余地はある．ここではこのような説得的な解釈をふまえて，ロレンスがなぜ問題の多い血迷い事を書いたのか，その意図をさぐってみたいと思う．たとえばインディアンの酋長らしき長老に語る，“I came away from the white man’s God myself.”（51）という女性主人公の言葉を信じるなら，キリスト教あるいはキリスト教に象徴される西洋文明に対する失望ないしはアンチテーゼとして読むことも可能である．

ロレンスが妻フリーダとともにニュー・メキシコに住むルーハンの招きを受けてタオスに着いたのが，37歳の誕生日を迎える１日前の1922年９月10日

だった[(4)]．以後の３年間はそのほとんどをニュー・メキシコで過ごした．この短編が書かれたのはロレンスの手紙から推測すれば1924年の春頃である[(5)]．翌年の1925年，*The Dial* 79号に掲載された．

## II

主人公の白人女性，名前は明らかにされていない．レダーマンという男の妻ということになっているだけである[(6)]．名前がないことで読者はかすかないらだちを覚えるかもしれない．対象物に名前をつけ概念として固定化することによって初めて安心するわれわれの認識作用のためであろう．ロレンスの意図ははっきりしないが，理由はいろいろと考えられる．まず，われわれの認識作用の裏をつくような形であえて名前をつけないことによって，主人公の女性像の観念的固定化を避けたと考えられる．あるいはインディアンにとっては“female white ant”(49) ぐらいにしか見えないと言っていることから，白人社会では人格をそなえた存在がインディアン社会ではまったく別次元のものであるということを象徴しているとも考えられる．また彼女という女性を描くのに“a large, blue-eyed, dazed woman, beginning to grow stout”(40) という表現を使っているので，その中の“dazed”という語にあえて注目すれば，彼女の存在自体のあいまいさを言おうとしたと考えてもよいであろう．あるいはまた旅の途中で彼女が経験する「死」から彼女の存在が無となることの象徴と見ることも可能である．

彼女が結婚したのは20歳のときであった．夫は10歳で放り出されたオランダからの流れ者で，いわゆる独立独歩の道を歩んできた，たたき上げであった．彼のことを“a little dynamo of energy”(39)，“what he had accomplished he had accomplished alone”(39)，“A little, wiry, twisted fellow”(39)，“a man of principles, and a good husband”(40)，“admired his wife to extinction . . . her body, all her points”(40) などの表現を使って言い表し，さらに彼女が彼にとっては今でも知り合った頃のままのバー

クレイ出のまぶしいばかりのカルフォルニア娘だったということから，精力的に自分の道を切り開いていこうとして仕事一筋ではあるが，よき夫として結婚した当時の情熱を少しも失うことなく妻を熱烈に愛する男，というイメージが浮かぶ．しかしそれに続く

> Her conscious development had stopped mysteriously with her marriage, completely arrested.（40）

という一節に出合うと，ロレンスの意図がどこにあるのかが明確に見えてくる．夫の賞賛は“stopped”と“arrested”の語が語っているように，裏返せば妻を閉じ込めておこうとする檻なのであり，夫が彼女のことをいまだに知り合った頃のままのカルフォルニア娘と考えるという裏には，20歳の時の彼女を観念の液体窒素の中に封印しておこうとする恐ろしい意志が見え隠れしている．このようにみれば彼女が結婚の結果，夫の隷属物となり，夫の賞賛という檻の中に押し込められ閉じ込められて，そこから抜け出すことができなくなってしまっていることがわかる．さらにまた，

> Her husband had never become real to her, neither mentally nor physically. In spite of his late sort of passion for her, he never meant anything to her, physically. Only morally he swayed her, downed her, kept her in an invincible slavery.（40）

という一節で，夫がどんなに情熱を注ごうと精神的にも肉体的にも彼女にとって現実的な存在になり得なかったことがわかる．そして夫はそれを漠然と感じていたがゆえに，彼女の上に君臨し，支配しようとしていたのかもしれない．あえて深読みをすれば，ロレンスは彼女の夫を，人間を支配しその生命を搾取する西洋文明の象徴として描いた，と読むことも可能である．

では彼女はなぜ，この流れ者の男と結婚したのか，その理由が気になると

ころである．だがこれについては何も書かれていない．結婚の動機をかすかに示唆するものは，たとえば物語の冒頭の

> . . . this marriage . . . would be an adventure. . . . the adventure lay in his circumstances, rather than his person.” (39)

という一節である．ここで“adventure”と“his circumstances”という言葉に注目すれば，彼と結婚することにより，彼女がこれまで経験したことのない別の世界で，別の生き方を見つけようとしていると読むこともできる．つまり人生の冒険を求めてたくましいやり手と見えた男に自分をかけた，ということである．ここにもかすかではあるが，それまでの自分とは決別して別の生き方をさがそうとするという意味で，背後に“I came away from the white man’s God myself.”(51) がこだましているように思われる．だが，その冒険を期待したあげく彼女の見たものは

> Great green-covered, unbroken mountain-hills, and in the midst of the lifeless isolation, the sharp pinkish mounds of the dried mud from the silver-works. Under the nakedness of the works, the walled-in, one-storey adobe house, with its garden inside, and its deep inner verandah with tropical climbers on the sides. And when you looked up from this shut-in flowered patio, you saw the huge pink cone of the silver-mud refuse, and the machinery of the extracting plant against heaven above. No more. (39)

というすさまじいばかりの情景であった．この一節にちりばめられている“lifeless”，“isolation”，“dried”，“walled-in”，“inside”，“inner”，“shut-in”，“refuse”，“No more”という一連の言葉は閉ざされた死の世界を物語っている．彼女が目にしたものはここに描かれたまさに閉ざされた

世界，死の世界であり，それはとりもなおさず彼女自身の世界でもある．窒息寸前の生活の中にあって，そこから逃れようと，時には夫に近くの町に連れていってもらったが，その町すらも死の世界だった．

> The great, sundried dead church, the dead portales, the hopeless covered market-place, where, the first time she went, she saw a dead dog lying between the meat stalls and the vegetable array, stretched out as if for ever, nobody troubling to throw it away. Deadness within deadness.[(7)] (39)

ここではわずか40語あまりの文の中に“dead”，“deadness”そして“hopeless”という語が繰り返し使われている．前述の引用と同様これもまた彼女が住んでいる世界の不毛性を象徴するものであり，期待して結婚したはずの夫が実は彼女を死の世界へと引きずり込もうとする死神のような存在であったということを象徴的に描いたものと読むことができる．

死の世界にいるようなこの閉ざされた不毛の生活に耐えきれず，時に夫に馬での外出をせがんだりもしたが，この地は無法地帯のため一人での外出は許されなかったという．その結果

> “Gradually her nerves began to go wrong : she must get out.” (40)

ということになっても不思議はないだろう．

そんなある日，すでに述べたように，夫が招いた若い鉱山技師のなにげない質問が，彼女の気持ちを決定的なものにする．彼女は何かに憑かれたように家を出る．召使いから，また息子からもなぜ一人で行くのかとたずねられるが，それまで眠っていたような彼女の自我意識が目覚める．“Am I *never* to be let alone? Not one moment of my life?”（43）はまさに夫による監禁にも等しい隷属状態から脱出しようという固い決心であり，“She did not

even turn to wave them farewell.”(43) もやはりそれまでの自分の生き方と訣別しようとする強い意志を表している．彼女の自我が牙をむいた一瞬だった．これを境に彼女の意識は白人世界のそれから次第にインディアンの世界へのそれへと踏み込んでゆくことになる．

こうして彼女は馬に乗って一人旅に出る．時は9月．途中誰もいない山頂で休憩する彼女は次のように描かれる．

> Curious that she was neither afraid nor lonely. Indeed, the loneliness was like a drink of cold water to one who is very thirsty. And a strange elation sustained her from within.
>
> . . . She heard the strange wailing shriek of a mountain-lion, and the answer of dogs. But she sat by her small camp fire in a secret hollow place and was not really afraid. (44)

彼女が山中で一人でいることが「怖くはなかった」と繰り返し書かれていることに注目すべきだろう．“the loneliness was like a drink of cold water to one who is very thirsty. And a strange elation sustained her from within.”という一節からは，やっと解放された彼女の高揚感が感じられる．それは裏返せば，彼女がそれまでいかに恐ろしい人間世界の中で生きてきたかを示してもいる．野生の動物にとっては都会の雑踏や喧噪は自分をおびやかす恐怖以外の何ものでもない．それと同じように彼女は夫に象徴される人間世界に対する恐怖に震えながら過ごしてきたはずである．彼女が獣たちの奇妙な鳴き声を聞いても怖さを感じなかったということも，そのような彼女の安堵感を物語っている．

山中の夜は寒い．毛布にくるまって寒さに堪えながら夜を過ごしているとき，彼女は次のような経験をする．

> she lay . . . feeling like a woman who has died and passed beyond. She

> was not sure that she had not heard, during the night, a great crash at the centre of herself, which was the crash of her own death. (44)

自分が死んでいくように感じ，かすかではあるが耳にした自分の中心部の大崩壊の音，これは彼女の固い自我意識が次第に崩れてゆくことの象徴である．彼女が歩を進めてさらに目的地に近づくにつれて，

> . . . she began to go vague and disheartened. . . . if she had had any will of her own left, she would have turned back, to the village, to be protected and sent home to her husband.
>
> But she had no will of her own. (45)

だったという．これは彼女がそれまで堅持していた白人世界での意志が消え去り，彼女が白人とインディアン世界の境界線を越えて，すでにインディアン世界へと足を踏み入れ始めている姿を象徴的に描いたものである．

この後，彼女の意識変化を表す表現として“feeling once more as if she had died.”(47) とか，“She knew she was dead.”(48)，“she aware that she had died.”(49) のように“died”や“dead”という言葉が続く．ニュー・メキシコの荒涼とした山中に放り出された彼女を描写する中で使われるこれら一連の言葉は，明らかに彼女の意志や西欧的自我意識が次第に崩壊してゆく様を象徴している．このように執拗なほどに彼女の死を繰り返す理由を，後に書かれた *Morning in Mexico* で述べている

> . . . we can understand the consciousness of the Indian only in terms of the death of our consciousness. (46)

という一節と重ね合わせて考えてみれば，ロレンスの意図がわかるであろう．その根底には，一方の意識が死なない限り他方を理解することなどでき

ないというロレンスの厳然としたとらえ方があるのだ．

旅の途中，彼女は初めて三人のインディアンに出会う．どこに行くのかとたずねられ，無邪気にも彼女はチルチュイ・インディアンとその家や神に会いに行くのだと答える．だがそう答えた後に相手の黒い大きな明るい目に合って初めて怖じ気づいたという．

> The man's eyes were not human to her, and they did not see her as a beautiful white woman. He looked at her with a black, bright inhuman look, and saw no woman in her at all. As if she were some strange, unaccountable *thing*, incomprehensible to him, but inimical. (47)

インディアンの目に映った彼女は美しい白人女性ではなく“*thing*”でしかなかったと強調し，彼らの目が“inhuman”だったと書かれていることに注目すべきである．ここで“inhuman”だというのは西欧人と同じ次元でとらえられる人間ではないという意味であろう．もちろんここにはロレンスが *Morning in Mexico* で言っている

> To them a white man or white woman is a sort of phenomenon ; just as monkey is a sort of phenomenon ; something to watch, and wonder at, and laugh at, but not to be taken on one's own plane. (24)

という見方がその根底にあると見て間違いないであろう．白人にとってはいかに美しい女性と思われるものであっても，インディアンにとっては単なる物，単なる現象のひとつでしかないとするこの見方は，インディアンと白人は相容れないものであり同列にとらえるべきものではないというロレンスの考えの繰り返しであるが，同じ *Morning in Mexico* の中で

> The Indian way of consciousness is different from and fatal to our way of consciousness. Our way of consciousness is different from and fatal to the Indian. The two ways, the two streams are never to be united. They are not even to be reconciled. There is no bridge, no canal of connection. (45-6)

とさらに論を進めて，インディアンの意識と白人の意識はまったくの別物で，そこに入り込もうとすれば互いに致命傷を与えるほどのものであるとまで言う．だからこそロレンスは彼女の死を強調し，西欧文明の中で培われてきた意識をいったんは死に追いやることで，インディアンの意識を理解させようとしたのであろう．だがその数行あとの

> The acceptance of the great paradox of human consciousness is the first step to a new accomplishment. (46)

の一説を読むと，それにとどまらずその対立と融合の上に何か新たなものを生み出そうとしていたことが理解できるのだ．

## III

彼女はこの三人とともに村に向かうことになる．三人のうちのひとりが彼女の馬の尻をたたいて馬を先に行かせようとする．それに対して彼女は怒りを感じるのだが，男はそれを無視してまた尻をたたく．

> The woman was powerless. And along with her supreme anger there came a slight thrill of exultation. She knew she was dead. (48)

ここで“powerless”は“dead”と同質であり，“exultation”という語と

相まって，怒りを感じこそすれもはや自分ではどうしようもできない自分の立場を認識するとともに，自分の存在を自分を超越したあるものに委ねてしまおうとする安堵感のようなものを表している．

ところで彼女を村に連れて行く三人の男たちの目に映った彼女の姿は“some giant, female white ant”(49) 程度のものでしかなかった．また“...there was nothing sensual or sexual in the look.”(52) と，彼女を性の対象として見てもいなかったという．彼女がインディアンにとって性の対象となり得ないということは，すでに述べたように白人女性の彼女が彼らにとっては“woman”ではなく，まったく次元が違うところにある“phenomenon”のひとつにすぎないことを強調したいためであろう．

村に到着すると三人の年上の男がやってきて，そのうちの長老らしき男が彼女の目的を確認する．その時の目がやはり非人間的な目だった．

> He was not looking at her as one human being looks at another. He never even perceived her resistance or her challenge, but looked past them both, into she knew not what.
>
> She could see it was hopeless to expect any human communication with this old being. (51)

人格を持った現代的白人女性としての彼女の自我は，インディアンの長老らしき男の前でその存在を主張しようとするのだが，男はまったく別次元の世界にいて，その視線は挑みかかろうとする人格次元での彼女を素通りしてゆく．まるで彼女という人格的存在を借りてその先に何か不可思議なものを求めているかのようだ．

この老人に村にやってきた理由を聞かれて，彼女は

> “I came away from the white man’s God myself. I came to look for the God of Chilchui.” (51)

と答える．そしてその後，彼女がその心臓をチルチュイの神に捧げる気持ちがあるかどうかたずねられると“Tell him yes”(54) と即座に答える．

老人の前に連れて行かれた彼女は，白と黒の服に着替えるように命じられる．男たちに出て行ってほしいというが聞き入られず，控えていた男たちに無言のままナイフでブーツや服を切り裂かれ裸にされる．髪をとめていたピンとクシがはずされ，その美しい金髪が肩にはらりと落ちる．老人は指で唇をしめらせ，その指で彼女の胸と体と背中に触れる．彼女はまるで死に神にでも触られたかのようにぞっとするのだが当然のことである．またこの場面は，インディアンたちによる白人女性陵辱以外の何ものでもないと言われても当然のようにも思われる[8]．だが生きた心臓を神に捧げるなどというわれわれには残虐で野蛮きわまりないことが彼らにとっては最大の重要事であるように，われわれの次元に引き寄せてみれば猥褻きわまりないことでも別次元から見れば神聖な場合もある．とすれば，たとえば生贄にふさわしい衣装に着替えるという，一種の着替えの儀式のようなものとして読むことも可能である．ただ，このような扱いを受けながらも

> And she wondered, almost sadly, why she did not feel shamed in her nakedness. She only felt sad and lost. Because nobody felt ashamed. . . . she was only utterly strange and beyond herself, as if her body were not her own.”(55)

と述べられているように不思議に恥ずかしさを感じなかったという．インディアンにとって彼女の存在が“phenomenon”程度でしかないことを考えれば，彼らの前で裸であることを恥ずかしがる理由はないわけであるし，彼女自身も“as if her body were not her own”と感じていることから，彼女の自意識すらすでにどこかに消えてしまったと見てもよいであろう．

これ以降，生贄としてとらわれの身となった彼女のもとにインディアンの男たちがびたびやってきて麻薬のような飲み物が与えられる．

> Afterwards she felt a great soothing languor steal over her, her limbs felt strong and loose and full of languor, and she lay on her couch listening to the sounds of the village, watching the yellowing sky, smelling the scent of burning cedar-wood, or pinewood. (56)

もちろん彼女が一種の幻覚剤のようなものを飲ませられていることは明らかである[(9)]．だが，彼女の幻覚状態は，おそらく白人世界からインディアンの世界へ移るための手段として使われているのであろう．つまり，インディアンの世界は彼女にとっては幻覚の世界に見られるようなまったく異質の世界であり，彼女が感じる嘔吐感は，自分の西欧的自我がインディアンの異質世界へ引きずり込まれることに対する必死の抵抗の象徴と読むことができる．

そんなある日，彼女は小屋から外に出してほしいと若いインディアンにたのむ．彼は彼女をある大きな家のテラスに連れて行く．彼女がそこで見たものは広場でインディアンの男や女たちが踊っている姿であった．

> As if she were to be obliterated from the field of life again. In the strange towering symbols on the heads of the changeless, absorbed women she seemed to read once more the *Mene Mene Tekel Upharsin*. Her kind of womanhood, intensely personal and individual, was to be obliterated again, and the great primeval symbols were to tower once more over the fallen individual independence of woman. The sharpness and the quivering nervous consciousness of the highly-bred white woman was to be destroyed again, womanhood was to be cast once more into the great stream of impersonal sex and impersonal passion. (60)

彼女が耳にする太鼓の音と歌声は深い重みをもって彼女を襲い，その存在を破壊しようとする．それは彼女の西欧的自我を打ち崩し，意志を奪い取ろう

とする力の象徴である．読み方によっては，自分の前に立ちはだかる女性を打ち壊し女性原理に対する男性原理の優越性を主張したいという欲望の象徴ともとれる．この裏には“impersonal sex”，“impersonal passion”の言葉が示しているように，自我を破壊することで，人格平面とは無縁の何か別の存在様式をもって再生を期待するロレンスの願いが隠れているようにも思われる．

その後彼女はインディアンの若者から，太陽がインディアンにとってどんなに大切なものであるか聞かされる．そして初めて自分が生贄となる意味を明確に認識する．

> “. . . when a white woman give herself to our gods, then our gods will begin to make the world again, and the white man's gods will fall to pieces. . . . the Indian women get the moon back and keep her quiet in their house. And the Indian men get the sun, and the power over all the world.”(10) (61-2)

このような宇宙観などは，合理主義こそ絶対とする考え方からすれば荒唐無稽以外の何ものでもない．もっとも，宗教というものは，かならずしも合理的とはいえない部分を内包しているのだが，しかし，ここでもやはり，われわれとは次元の違うインディアンにとっては，太陽こそ彼らの存在の根幹を支える大きな存在だった．ロレンスは白人とインディアンの宇宙観と宗教観について次のように言う．

> In our conception of religion there exists God and His Creation : two things. We are creatures of God, therefore we pray to God as the Father, the Saviour, the Maker.
>
> But strictly, in the religion of aboriginal America, there is no Father, and no Maker. There is the great living source of life : say

the Sun of existence : to which you can no more pray than you can pray to Electricity. And emerging from this Sun are the great potencies . . . (*Morning in Mexico* 64)

キリスト教では造物主たる神がこの世を創造したという考えだが，インディアンは太陽という偉大な生命の源泉のもとに宇宙全体が生きているというとらえ方をする．だからこそ太陽を生き生きと活かせておくために心臓を捧げなければならないというのである．

それまで大事に養われてきた彼女はついに祭壇に連れて行かれる．

When she was fumigated, they laid her on a large flat stone, the four powerful men holding her by the outstretched arms and legs. Behind stood the aged man, like a skeleton covered with dark glass, holding a knife and transfixedly watching the sun ; and behind him again was another naked priest, with a knife. . . .

Yes, the rays were creeping round slowly. As they grew ruddier, they penetrated farther. When the red sun was about to sink, he would shine full through the shaft of ice deep into the hollow of the cave, to the innermost.

She understood now that this was what the men were waiting for. Even those that held her down were bent and twisted round, their black eyes watching the sun with a glittering eagerness, and awe, and craving. The black eyes of the aged cacique were fixed like black mirrors on the sun, as if sightless, yet containing some terrible answer to the reddening winter planet. And all the eyes of the priests were fixed and glittering on the sinking orb, in the reddening, icy silence of the winter afternoon.

. . . In absolute motionlessness he watched till the red sun should

send his ray through the column of ice. Then the old man would strike, and strike home, accomplish the sacrifice and achieve the power.

The mastery that man must hold, and that passes from race to race.（70-1）[11]

目の前に情景が浮かび上がってくるかのようにあざやかな描写である．香の煙をあびながら生贄台に寝かされた彼女，彼女の手足を押さえている四人の男，ナイフを振り上げている二人の司祭，男たちは真っ赤に燃えて沈みゆく太陽をじっと見つめ，ナイフを振り下ろす瞬間を待っている．すでにあげたケイト・ミレットの解釈のように，これはまぎれもない“death fuck”であるといえるかもしれない．“knife”，“sun”，“ray”，“ruddier”，“penetrated”，“shaft”，“hollow”，“cave”，“innermost”，“column”に加えやがて流されるであろう生贄の女性の血のイメージなど，“death fuck”の解釈をさそう語があまりにも並びすぎているからだ．たとえばシェーラ・マクラウドも“It is clear that the sacrifice constitutes a sexual act between the male and female principles”（129）と，やはり“phallic symbol”と見ている．だが，沈みゆく太陽が最後の一瞬に放つ赤々と輝く一筋の光線が，氷の柱をつらぬいて洞穴の最奥にまで達する瞬間，ナイフが振り下ろされ生贄の儀式が成就するというこの構図は，女性原理と男性原理の交合の上にあらたな生の完成が果たされるということの象徴のように思われる．それが何か明確な形では語っていないが，結末に余韻を残すという小説技法を越えて，その余韻のなかにロレンスの思いが込められているような思われてならない[12]．

## IV

ロレンスの遺稿集 *Phoenix* のなかに次のような一節がある．

> I shall never forget that first evening when I first came into contact with Red Men, away in the Apache country. It was not what I had thought it would be. It was something of a shock. Again something in my soul broke down, letting in a bitterer dark, a pungent awakening to the lost past, old darkness, new terror, new root-grief, old root-richness. (95)

これはロレンスが初めてインディアンに接したときの衝撃的な印象を表明した一節である．“something in my soul broke down”という言葉がいみじくも示しているとおり，彼にとってインディアンとの出会いは彼自身を根底から変えてしまうほど強烈なものであり，それまでの西欧的な価値基準や西欧的な感性といったものを根底から突き崩すほどのものであった．それと同時にこれは，主人公の女性がインディアンの村への途上に体験したあの死と通じる一節でもある．そしてさらにロレンスは同じ *Phoenix* の中で，

> But break through the shiny sterilized wrapping, and actually *touch* the country, and you will never be the same again.
>
> I think New Mexico was the greatest experience from the outside world that I have ever had. It certainly changed me for ever. Curious as it may sound, it was New Mexico that liberated me from the present era of civilization, the great era of material and mechanical development. (142)

と述べているのだが，“you will never be the same again.”とか“It certainly changed me for ever.”という言葉にあらわれているように，ニューメキシコが彼に与えた衝撃の深さがわかる．さらにその上で，

> It is so easy to understand that the Aztecs gave hearts of men to the

> sun. For the sun is not merely hot or scorching, not at all. It is of a brilliant and unchallengeable purity and haughty serenity which would make one sacrifice the heart to it. Ah, yes, in New Mexico the heart is sacrificed to the sun and the human being is left stark, heartless, but undauntedly religious. (143)

と，この短編の女主人公よろしくその心臓を太陽に捧げんばかりの勢いである．このようなロレンスの体験の率直な告白を読むと，ロレンスがこの短編を書いた最大の理由のひとつが理解できるであろう．だがすでに引用した“The acceptance of the great paradox of human consciousness is the first step to a new accomplishment.”の一節を思い出すまでもなく，ロレンスは単にインディアンの宗教を描くのではなくて，そこにキリスト教の西欧文明社会を象徴する白人女性をからめ，生贄という儀式を通じて両者の融合をはかり，その先にあらたな生を求めた，と言ってよいであろう．彼女が口にしたあの“I came away from the white man's God myself. I came to look for the God of Chilchui.”という言葉の背後には，後に *Lady Chatterley's Lover* を書かせる動機のひとつともいえる極度に潔癖で窮屈なピューリタン精神に対する嫌悪と，第一次大戦を引き起こした西欧文明に対する絶望的な気持ちが込められている，と同時に，たとえば見知らぬチルチュイの神のような何かあらたな神を，そしてあらたな生存様式を希求する気持ちが込められてもいるように思われる．アステカ人の絶滅をして“A great and lovely life-form, unperfected, fell with Montezuma”（*Phoenix* 91）と嘆くロレンスは決して“sentimentalism like the smell of bad eggs”（*Morning in Mexico* 45）に落ち込んでいるのではない．ここでロレンス晩年のエッセイ *Apocalypse* の最後の一節“Start with the sun, and the rest will slowly, slowly happen”（149）を思い出し，ニュー・メキシコでの衝撃的な体験がロレンスにこの短編を書かせたことを重ね合わせると，それは失われてしまった“great and lovely life-form”を取り戻すための下準備

であったかのようだ.

引証資料

Cavitch, David. *D. H. Lawrence and the New World*. Cambridge University Press, 1969.

Hough, Graham Coulder. *The Dark Sun*. Octagon Books, 1983.

Lawrence, D. H. *The Cambridge Edition of the Works of D. H. Lawrence : The Woman Who Rode Away and Other Stories*. Cambridge University Press, 1995.

—*Apocalypse and the Writings on Revelation*. ed. Mark Kalnins. Cambridge University Press, 2002.

—*The Letters of D. H. Lawrence* IV. ed. Warren Roberts, James T. Boulton and Elizabeth Mansfield. Cambridge University Press, 2002.

—*The Letters of D. H. Lawrence* V. ed. James T. Boulton and Lindeth Vasey. Cambridge University Press, 2002.

—*Morning in Mexico*. Heinemann, 1975.

—*Phoenix*. The Viking Press, 1974.

Luhan, Mabel Dodge. *Lorenzo in Taos*. New York : Kraus Reprint Co., 1969.

McCollum, Laurie. "Ritual Sacrifice in 'The Woman Who Rode Away' : A Girardian Reading." *D. H. Lawrence : New Worlds*. ed. Keith Cushman and Earl G. Ingersoll. Fairleigh Dickinson University Press., 2003.

Millett, Kate. *Sexual Politics*. London : Virago Press, 1999.

Roberts, Neil. *D. H. Lawrence, Travel and Cultural Difference*. Palgrave, 2004.

Thornton, Weldon. *D. H. Lawrence : A Study of the Short Fiction*. Twayne Publishers, 1993.

石田英一郎『マヤ文明』中央公論社，1967.

コウ，マイケル・D. 寺田和夫／小泉潤二訳『メキシコ』学生社，1975.

スーテル，ジャック狩野千秋訳『アステカ文明』白水社，1974.

増田義郎『古代アステカ王国』中央公論社，1976.

増田義郎『太陽と月の神殿』新潮社，1971.

宮西照夫『マヤ人の精神世界への旅』大阪書籍株式会社，1985.

〔注〕

(1) 野蛮ということについては次のようなエピソードが示唆的である．16世紀ス

ペイン人に征服され，その圧政を嫌ってイスパニオラ島からキューバに逃げてきていた一人の酋長がいた．彼は勇敢ではあったが，すぐに捕らえられてしまった．そしてひどい拷問にかけられた末に火刑に処せられることになった．処刑の直前，スペイン人はキリスト教への改宗を彼に問うた．「改宗すればおまえの魂は救われるのだぞ，という処刑者の言葉に，酋長はこんな質問を発した．「そして，魂の救われて行く先の天国には白い人間たちもいるのか？」そうだという答えをきいて，彼は昂然と，「それでは私はキリスト教徒などにはならない．お前たちのような残忍な人間どもと顔をつき合わせるのは，もうまっぴらごめんだ」と言い放った．そして火に呑まれて死んでいったという」．増田義郎，『古代アステカ王国』，（中央公論社，1976），15

(2) 「アステカ人は考えた．――太陽は，夜の闇の中の無数の星とたたかっている．その星の数のようにたくさんの捕虜を戦争でつかまえて，いけにえに捧げなくてはならない．ひとりひとりの捕虜が，ひとつひとつの星を意味する．破壊的な宇宙の力ときわどい戦いをつづける太陽に栄養をあたえ，人間世界の生存を確保するために，いけにえの捕虜はピラミッドの頂上で虐殺され，どくどくと流れるその血や，生身から取り出された心臓が，太陽にささげられなければならない――そしてアステカ人は，この考えを実行にうつしたのである」．前掲書，80．

(3) ロレンスはフレイザーの『金枝篇』を読んでいて，ポーニー族の酋長がスー族の娘の心臓をむさぼったという一説を読んでいたであろうという．Laurie McCollum, “Ritual Sacrifice in ‘The Woman Who Rode Away’: A Girardian Reading”, *D. H. Lawrence: New Worlds,* ed. Keith Cushman and Earl G. Ingersol (Fairleigh Dickinson University Press, 2003), 233.

(4) “Of course it was for this I had called him from across the world — to give him the truth about America : the false, new, external America in the east, and the true, primordial, undiscovered America that was preserved, living, in the Indian bloodstream”. Mabel Dodge Luhan, *Lorenzo in Taos* (New York : Kraus Reprint Co., 1969), 52.

(5) 1924年7月7日付 Curtis Brown 宛ての手紙に“I enclose MS. of a story, ‘The Woman Who Rode Away’.”の1行がある．*The Letters of D. H. Lawrence* V, ed. James T. Boulton and Lindeth Vasey (Cambridge University Press, 2002), 71. 以下 *Letters* と略す．

(6) たとえば Laurie McCollum は主人公の女性に名前を与えていないことについて“The woman’s lack of name places her above the merely personal kind of existence Lawrence so regularly maligns in his writings.”と述べ

て，この短編における彼女の位置づけを神話的なものとしている．“Ritual Sacrifice in ‘The Woman Who Rode Away’: A Girardian Reading.” *D. H. Lawrence: New Worlds,* ed. Keith Cushman and Earl G. Ingersoll (Fairlegh Dickinson University Press, 2003), 239-40. また David Cavitch は “She is the most rudimentary human figure, barely capable of individual consciousness. She is of no personal interest to us, and her chief particularity is that her identity is blanked out like her name. . . . She is his own persona, his maternal image of the unfulfilled feminine quality of his soul.” と言って彼がいだいている母性イメージの象徴としてみている．*D. H. Lawrence & the New World* (Oxford University Press, 1969), 167.

(7) 1923年10月5日付の Witter Bynner に宛てた手紙に次のように描かれている．“This west is much wilder, emptier, more hopeless than Chap ala. It makes one feel the door is shut on one. There is a blazing sun, a vast hot sky, big lonely inhuman green hills and mountains, a flat blazing littoral with a few palms, sometimes a dark blue sea which is not quite of this earth — then little towns that seem to be slipping down an abyss — and the door of life shut on it all, only the sun burning, the clouds of birds passing, the zopilotes like flies, the lost lonely palm-trees, the deep dust of the roads, the donkeys moving in a gold-dust-cloud. In the mountains, lost, motionless silver-mines. Alamos a once lovely little town, lost, and slipping down the gulf in the mountains, forty miles up the awful lest road I've ever been bruised along. But somehow or other, you get there. And more wonderful, you get out again. — There seems a sentence of extinction written over it all. — In the middle of the little covered market at Alamos, between the meat and the vegetables, a dead dog lay stretched as if asleep. The meat vender said to the vegetable man : you'd better throw it out. The yes-man looked at the dead dog and saw no reason for throwing it out. so no doubt it still lies there.” *Letters* IV, ed. Warren Roberts, James T. Boulton and Elizabeth Mansfield (2002), 505-6.

(8) Kate Millett はインディアンと主人公の女性がまったく相容れない理由を “Her captors . . . are supernatural males, who are “beyond sex” in a pious fervor of male supremacy that disdains any genital contact with women preferring instead to deal with her by means of a knife”. “The ersatz Indians are ultimate maleness and therefore can have no relationship with the female, as they are entirely beyond trucking with her” と言って，強烈

な男性至上主義のあまり女性との接触がもてないことを如実に表していると言う．そしてインディアンたちが性を感じさせないのは “. . . in this apotheosis of puritanical pornography, Lawrence has separated sexuality from sex” からだと言う．さらにこの場面を取り上げて “Their relations with their female victim are of an antiseptic antisexual quality which is remarkably obscene, both in its arrogance and in its deliberately inhuman quality.” としている．*Sexual Politics* (London : Virago Press, 1999), 290.

(9) 幻覚剤の体験については宮西照夫『マヤ人の精神世界への旅』(大阪書籍株式会社，1985)，204-36に詳しい．

(10) アステカ人にとっては太陽の死は自らの死と同価であった．「一般に人間の使命，とりわけ，太陽の民族であるアステカ人の使命は，虚無の襲撃を断固としてはねかえすことであった．このためには，太陽と大地とそしてすべての神々に，もしそれがなかったら，現世の機構は麻痺状態におちいるであろうと想像される「貴重な水」，すなわち人間の生血を捧げることであった．このような基本概念から，聖戦と人身御供の儀式が展開される．その両方とも，神話によると，現世の当初からはじまっていた．太陽はぜひとも血を望んでいた」．ジャック・スーテル，狩野千秋訳，『アステカ文明』，(白水社，1974)，p. 95.

(11) 生贄の儀式についてはたとえば次のようである．「いけにえに予定された奴隷や供出された幼児は，その祭の晴れの日まで，身を汚さぬよう，厳重な監視のもとに大切に養われた．……大勢ではなばなしくいけにえを神殿の中庭にともない，身体を青く塗り，頭にとんがり帽子をかぶせ，円形の犠牲の祭壇までつれてくる．そして神官たちがその石を青く塗り，神殿を清めて悪霊を追い出した後，チャクが彼を仰向けに石段の上に横たえ，四人で手足をおさえる．そこへ石のナイフを手にした犠牲執行者のナコムがきて，彼の左脇の乳下の肋骨の間をさっと切り開き，すばやく手をつっこんで生きた心臓をつかみ出す」．石田英一郎『マヤ文明』(中央公論社，1973)，71-2.

(12) Laurence Steven は “Although Lawrence’s personal motivation manifests itself in a desire to kill the woman and take her power, it is misleading to see this as the final significance of the story. The actual enemy in Lawrence’s work is the white consciousness of the West which strips people of their autonomy and turns them into objects” といって作品の目的が女性への敵意ではないことをあらためて確認している．“ ‘The Woman Who Rode Away’: D. H. Lawrence’s Cul-De-Sac,” *D. H. Lawrence : Critical Assessments*, ed. David Ellis and Ornella De Zordo. vol. III (Helm Information, 1992), 540.